

Round II

映画文学人生論

山本周五郎『青べか日記』(1985)「新潮社」
三木成夫『胎児の世界』(1983)「中公新書」
本川達雄『ゾウの世界ネズミの世界』(1992)「中公新書」
夏目漱石『門』(1910)「朝日新聞」
萩原朔太郎『郷愁の詩人と謝蕪村』(1936)「第一書房」
正宗白鳥『このごろ疑問に思ふこと』(1960)「読売」

名も知らぬ遠き島より 流れ寄る椰子の実
一つ 故郷の岸を離れて 汝はそも波に幾月・

「映画文学人生論」のモチーフ（表現の動機・
きっかけとなった、中心的な思い）は何か？

小説『青べか物語』の「人は何によって生くるか」と映画『男はつらいよ』の「望郷の念やみがたく」につきうごかされ、第一ラウンドでは百本の映画を観て、それぞれの原作を読んだ。第二ラウンドでは映画にはこだわらず、さらに百篇の小説、随筆、伝記、評論を読み漁る。

ということなら、モチーフは郷愁ではないかと思う。「名も知らぬ遠き島より 流れ寄る椰子の実 一つ 故郷の岸を離れて 汝はそも波に幾月」。

ここで島崎藤村の詩『椰子の実』を思いだしたのは、三木成夫『胎児の世界』で遠い昔の生命記憶の例として引用されていたからだ。この詩が心にひびくのは、胎児の頃にさかのぼって、先祖から受け継いだ人類の生命記憶が里帰りするようによみがえるからではないか。

夏目漱石『門』の宗助は、鎌倉の円覚寺で「父母未生以前本来の面目は何か」という公案を与えられ、答えられなかった。正解は一つとはかぎらないが、たとえば、「椰子の実一つ」という答えでもよいような気がする。

「椰子の実一つ」の記憶は時間を含んでいる。本川達雄によれば、ゾウにはゾウの時間、ネズミにはネズミの時間があり、物理的時間と生理的時



Round II

映画文学人生論

間はちがう。ところが、漱石によれば、時間というものは便宜上の仮定であって、真実に存在しているものではない。（『文芸の哲学的基礎』）。

時間が存在しないとすれば、記憶も郷愁もないはずだが、現実には人間は記憶を持ち、郷愁を覚える。与謝蕪村のような郷愁の詩人がいれば、正宗白鳥のような郷愁の散文家もいる。

君あしたに去りぬ

ゆうべの心千々に何ぞ遥かなる。

君を思うて岡の辺に行きつ遊ぶ。

岡の辺なんぞかく悲しき。

この詩の作者の名をかくして、明治年代の若い新体詩人の作だと言っても、人は決して怪しまないだろうが、実は江戸時代の俳人と謝蕪村によって試作された新詩体の一節と紹介したのは萩原朔太郎。その朔太郎も郷愁の詩人だった、

詩や歌には門外漢の散文作家正宗白鳥も、「衰微し、没落しつゝある所謂「純文学」なるもの、或る郷愁を覚えてゐる」（『このごろ疑問に思ふこと』と述懐した。白鳥のいう「純文学」は小説は面白くなくつてもいゝもの、或ひは面白くてはいけないものと、作家が感ずるやうになった自然主義文学の思潮に染まっている。

松も時なり、竹も時なり。

時は飛去するとのみ解会すべからず。 道元